高崎経済大学論集　第49巻　第２号　2006　131頁～139頁

平成18年度第１回学術講演会（講演抄録）

事実は理論に勝る

～名探偵に学ぶ経済分析術～

Facts Are Better Than Theories, After All.

講師　赤　羽　隆　夫
（元経済企画庁事務次官・景気探偵）

「実際科学者はみな名探偵でなければならない」
寺田寅彦（『随筆集』第４巻、岩波文庫）

わが名は景気探偵

私の商売はエコノミスト、経済分析屋である。エコノミストが12人集まれば、少なくとも13の異なった見解が表明される。これはジョークだが、決して荒唐無稽な作り話ではない。P・A・サムエルソン（ノーベル経済学賞第２回目受賞者）は、次のエピソードを紹介している（『経済学』14版、1992年）。

イギリスのある王立委員会が５人の著名なエコノミストに行った諮問に対して、６通りの意見が併記された答申が出てきた。全員が違った見解だったばかりか、中の１人は相矛盾する２つの意見を表明していた。それが誰あろう、あの有名なJ・M・ケインズだった。「おかしいじゃありませんか？」と聞かれても、彼は「情報（前提）が違えば、結論も変わる。君だってやはりそうするでしょう」とすましていたという。

サムエルソンは「ケインズ先生は１日に２回だけ正しい時刻を告げる壊れた時計ではありたくなかったのだろう」と、やや意味不明なコメントをしているが、経済の専門家であるエコノミストがこのような人たちであるというのは大変困った話だ。経済問題の解決がますます困難になっている（普通そう思われている）現代なのに、頼りにすべき専門家が精神分裂症状的な意見の持ち主の集団だというのは、まったくお手上げというしかない。

だが、手がないわけではない。宗教でも信じるように、ある人物の説に帰依してしまうことだ。ケインズの学説だから、サムエルソンの書いた論文だから、また○○氏の予測だから、ということではなから信用してしまう、というわけ。しかし、これは裁判の証人の宣誓文ではないが、「すべ

ての真実を、そして真実のみ」を自らの判断基準とする独立自尊の自由人の取るべき態度ではないと思う。

私自身長い間こうした悩みを悩んでいたが、もう４分の１世紀以上も昔のある日、寺田寅彦の文章を読んでひらめいたのである。「ああ、そうだ、そうなんだ。名探偵なんだ。彼らの探偵術を応用すればよいのだ。そうすれば自分で経済の謎を解明し、真理を見出だすことができるようになるはずだ」と。シャーロック・ホームズを筆頭にエルキュール・ポアロ、エラリー・クイーンなど数々の名探偵の発想法、推理のロジックおよび論証術が経済分析や景気の予測に応用可能だと気付いたわけで、以来「景気探偵（Econo-Detective）」と自称している

経済は難しくない（難解なのは経済学）

一般に経済問題は複雑であり、近年とみに複雑さの度合いが増していると理解されている。本当にそうだろうか？　夏目漱石の『草枕』に「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向こう三軒両隣にちらちらする唯の人である」という有名な一文がある。唯の人とは平凡人のことだ。平凡人が世の中を作り経済を動かしている。経済は平凡人たちの日常の営みが集積したものだ。そうなら本来複雑であろうはずはないではないか？　貴君や私、いや難解な講義で学生たちを悩ましている大学教授の先生方だって、「あなた自身の日常をかえりみて、そんなに複雑に振る舞っておいでですか？」と問われたら、ほとんどはノーと答えるだろう。

「犯罪もその特徴は芸術作品と変わらない。仕上がりがいかに複雑に見えようと、中心はあくまで単純だ」。これはＧ・Ｋ・チェスタトンが創造した名探偵ブラウン神父の言葉である（『ブラウン神父の童心』）。つまり、どんな巧妙な事件でも表面（現象）は複雑だとしても、中心（本質）は単純である。ただ、追及者の目を間違った方向へ誘うミスディレクション（偽の手掛かり、トリック）が仕組まれているために、なかなか真実が見えてこないだけのことなのだ。

犯罪に関するブラウン神父の観察は、そのまま経済について妥当する。つまり、現象面では複雑な経済問題も本質は単純である。しかも、現象面で複雑だというのも、往々にして観察の仕方が悪いからである。歪んだレンズの眼鏡を掛けて見れば、単純な図柄でも複雑怪奇な模様に見えてくるようなものだろう。

シャーロック・ホームズは自らを「犯罪問題のちょっとした目利き（connoisseur）にすぎない」（『恐怖の谷』）と謙遜する。“connoisseur”とは「利き酒の名手」（優秀なソムリエ）という意味だ。利き酒の名手なら当然お酒のことには万事精通している人たちだろうが、「貴兄はお酒作りの学問である醸造学の大家であるか？」と問えば、多くは自分は醸造学の学者などではないと答えるだろう。私自身は「経済問題のちょっとした目利き」でありたいと願ってはいるが、経済学者であるとも、そう呼ばれたいとも思っていない（まあ、もともと学者となる訓練など一度も受けたことはないのだから、呼ばれないのは当たり前やね。ホンマに！これは負け惜しみかな？）。

そんなホームズだが（ポアロなども）、いったん捜査に乗り出すと、スコットランドヤード（ロンドン警視庁）が解決できずあわや迷宮入りという難事件を「快刀乱麻を断つ」のあざやかさで解決してしまう。それほどまでに有能にして有効なホームズ探偵術であるが、本人にいわせると「常識をちょっとばかり体系化した程度のシンプル・アートにすぎない」（『SHの事件簿』）。だからこそ、事件が解決された後で名探偵から説明されれば、あれほど複雑怪奇に見えた事件が実は誰にでも容易に解決できたはずの単純な事件であったことが明らかになるのである。つまり、名探偵の探偵術の神髄は「常識の体系化あるいは常識応用術（systematized or applied common sense）」にあり、というわけだが、これは経済分析も同じである。

探偵術の構造

では、名探偵の探偵術はどのような特徴と構造を有しているだろうか？　彼らの活動の記録である探偵小説をノートを取りながら精読して、その中から彼らの方法のエッセンスを抽出し、体系的に整理したものの一端を紹介してみよう。

１．名探偵の条件

「理想的な探偵に必要な条件は観察力、演繹力、それに知識」とホームズは指摘する（『四つの署名』）。これはエコノミストとして成功するための必要条件でもある。ただし、この３つだけでは十分条件には足りない。「執念」というもう１つの条件が加わることが必要。執念とは「いったん事を始めたら最後までやり遂げる根性（“Never Give-Up！”の精神）」という意味だ。最低限この４つの条件が満たされるなら、探偵やエコノミストに限らず、どんな職業でも成功間違いなしだろう。

２．謎の解明法（実証分析による真理発見法）

名探偵による謎解きは、一般には「仮説演繹法」と呼ばれる方法で行われる。作業仮説の定立とデータ（観察事実）による検証の繰り返しを通じて真実を明らかにすることを企図する方法だ。アメリカ・プラグマティズムの哲学者Ｃ・Ｓ・パース（1839－1914）によれば、これは次の３段階から構成される。

①第１段階…仮説発想（作業仮説の構築）ab-duction

謎（一見不可解な事実）もこう理解（説明）すれば不可解ではなくなる。そうした仮説の発想が出発点になる。直観力によるひらめきを必要とする行為。具体的な例は後節で論じよう。

②第２段階…演繹（データによる検証可能な命題の導出）de-duction

観察力と論理的な思考能力の研磨が必要。

③第３段階…帰納（データによる命題の検証）in-duction

統計解析の技法 technical arts（アーツですよ）に習熟することが不可欠。

なお、こうして見出だされた新しい仮説（検証されたもの）は旧来の仮説よりも説明力が大でなければならない。つまり、従来の仮説で説明されたことが説明可能であることは当然だが、旧仮説が解明に失敗した謎解きにも成功しなければならない。

３．事実（データ）の重視とフェアプレイ原則

①「シェフにはなれないエコノミスト」－データ批判の重要性

「データだ、データだ。粘土がなければレンガは作れない」（『SHの冒険』）。ホームズはこう叫び、事実の発掘に全力を傾注する。とはいえ、事実でさえあればよいというものではない。実証経済分析は事実による分析だから事実の批判的な吟味という作業から出発しなければならない。名探偵は必ずそうしている。しかし、多くのエコノミストは社会的分業に対する（アダム・スミス以来の）職業上の過信からか、あるいは怠慢からか（おそらく後者からだろう）、こうした作業をしない。美味しいお料理作りの要諦は「材料八分に腕は二分」だという。お料理の名人とは、その技量もさることながら食材の良し悪しを見極める眼力の備わった人だ。だから、私はデータの吟味を怠るエコノミストは決して「経済分析のシェフにはなれない」と批判している。

事実に関しては、偶然の事実（見せかけの事実）と本質的な事実を見分けること、些細な事実だからといって軽視しないこと（「神は－悪魔も－細事に宿る」という格言がある）等々、多くの留意点を指摘できる。ホームズはワトスン博士に対して「君は見ているが観察していない。見ると観察するとは大違いだ」（『SHの冒険』）というが、実証分析における「事実」という問題は結局観察力の問題に帰着する。

その点からは、エコノミスト、とくに経済学者の最大の過誤というべきは「定型化事実」stylized factsを基礎にモデルを構築する点にあると思う。定型化事実なるものが実は「プロクルステースの寝台」（強引な画一化）になってはいないかどうか、作業で真っ先に行うべき、その点に関する吟味自体をサボタージュする行為だからである。

（注）「プロクルステースの寝台」とは、古代ギリシャ・アッティカの盗賊プロクルステースが捕らえた人を鉄の寝台に寝かせて長い者は足を切り、短い者は引き伸ばしたという伝説上の故事から転じて、思考法などをあらかじめ決められた枠組みに無理やり押し込もうとするやり方をいう。

②フェアプレイ原則

「推理小説は作者と読者の知恵比べだから、専門的知識がなければ、謎が解けないような作品は失格」（坂口安吾）。これがいわゆる「フェアプレイ原則」だ。作者と読者の知恵比べを対等の条件で行うことを可能にするために、この原則はまた作者手持ちのすべてのデータをあらかじめ（物語のできるだけ早い段階で）提示することを要求する。

経済分析は探偵小説書きとは違う。だから、経済の謎解きには専門的な知識をどんどん駆使す

るのがよい。しかし、データを残らず提示すべきだとの原則は実証経済分析にも厳格に適用されるべきだろう。つまり、分析の全過程を第三者が追計算して、チェックできるようにデータまで含めすべてが公開されるべきだという意味だ。そういう観点からは、計量経済学モデル分析にはブラックボックスの部分が存在し、問題なしとしないと考えている。

「事実の理論負荷論」という詭弁

これまで、実証分析における事実の重要性を強調してきた。しかし、ここで「事実の理論負荷」（N・R・ハンソンという科学哲学者が代表的な論客）という問題が私たちの行く手に立ちはだかる。すべての事実は、観察のためあらかじめ設定された枠組みを離れては存在しえない。つまり、「準拠枠」（The Frame of Reference）としての理論が前もって与えられていなければ、観察自体が可能にならない。観察の結果えられた事実も理論がまずあって初めてそうした事実の存在が認識できるという議論なのだ。理論がなければ事実もないというのだから、観察事実によって理論を実証することはもちろん、反証することも不可能なことになる（子供が親を産むことはできない！）。

いったんこの議論を承認してしまうと、観察事実の客観性、自律性が否定されるから「何でもあり」で、どんな説でもまかり通ることになる。まさしく「12名のエコノミストで13の意見」というジョークどおりの結果だ。こんなことをいうと、何やら難しい話だなと思われるだろう。そこで図１を見てほしい。これはサムエルソンの教科書『経済学』の第１章からの転載した図である。

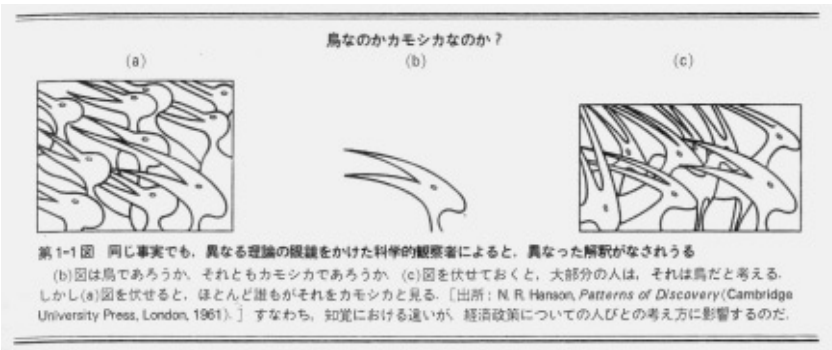

図１　鳥かカモシカか

図への説明にある通り、同じ事実（b）の集合であっても見る人によって違った認識になる。つまり、ある人はフラミンゴの集団（a）と、他の人はカモシカの群れだ（c）と認識するが、それは前者があの動物は鳥だ、後者はいや鹿だと（意識的にか、無意識にか）考えて観察するからそれぞれそう見えるのだという。その際「あれは鳥だ」、「いや鹿だ」が「準拠枠としての理論」なんだそうである。

こうした図形のことを多義図形（いわゆるだまし絵）という。本来は目の錯覚 Visual Illusion を

利用したお遊びなのであるが、「理論負荷論」を信奉するサムエルソンはこの絵を使って経済学者の間の見解の差、政策論の違いが生まれる理由を説明している。彼はまた「（どちらが描かれているのかと問われても）正しい答えというものはない。状況 context 次第でいずれもが正解でありうる。同じことが科学的事実や理論についてもいえる」と解説する。

だが、この「事実の理論負荷」という議論には詭弁のにおいがプンプンする。いま科学者たちは研究目的であの動物を捕獲しようとしている、と考えてみよう。そのためには動物がカモシカかフラミンゴかを同定しなければならない。獣類捕獲用のわなではフラミンゴは捕らえられないからだ（逆は逆）。どうすればよいのか？　空砲を撃ってみることだ。その結果、この動物が空へ舞い上がり遠くへ飛び去ったとの事実が観察されたならフラミンゴであることを実証できたことになる（森の中へ全速力で逃げ込めばカモシカだったことが判明する）。

サムエルソンの誤りは、どちらかを判定するため必要な追加データが不足する段階でせっかちに結論を出している点にある。つまり、彼は「状況次第でいずれも正解」などと解説せず、シャーロック・ホームズのように「十分なデータが入手できていない段階で早まった結論を出してはならない」（『SHの冒険』）と警告すべきだったのである。

（注）「サムエルソンは思弁的には実証主義者を自称し、したがって理論上は諸理論は現実世界の諸事実によってテストされなければならないと主張しながら、実際には一度もそうしたことはない」（ディアドラ・N・マクロスキー著赤羽隆夫訳『ノーベル賞経済学者の大罪』（筑摩書房）pp78-79

彼の言行不一致は、おそらく「事実の理論負荷論」の詭弁に自縛されてのことであろうと推測する。

実践例と学習法

以上がわが景気探偵術の入門編のあらましだが、ここで実践編の一事例として「増減税の景気効果」をどう見るかという問題を検討した上で、経済分析の才能開発法の一端について述べてみよう。

１．減税は有効だったか？

バブル崩壊後の平成不況が予想以上に長引き、生産活動の低迷も予想外に深刻だと認識が広まった平成６年以降大幅な所得税減税が実施されてきた。このような政策がとられたのは、当然のことながら、所得減税の景気刺激効果が大きいという認識からであった。この認識は政府当局ばかりではなくエコノミストの多数説でもあった。しかし、私自身は減税の景気刺激効果はあるとしても微小である反面、後世代の負担増が大きくなるだけだ、との考えを機会あるごとに訴えていた（実際に政策を動かす力は皆無だったが、伊東光晴京都大学名誉教授など私見を評価し、論文その他にお

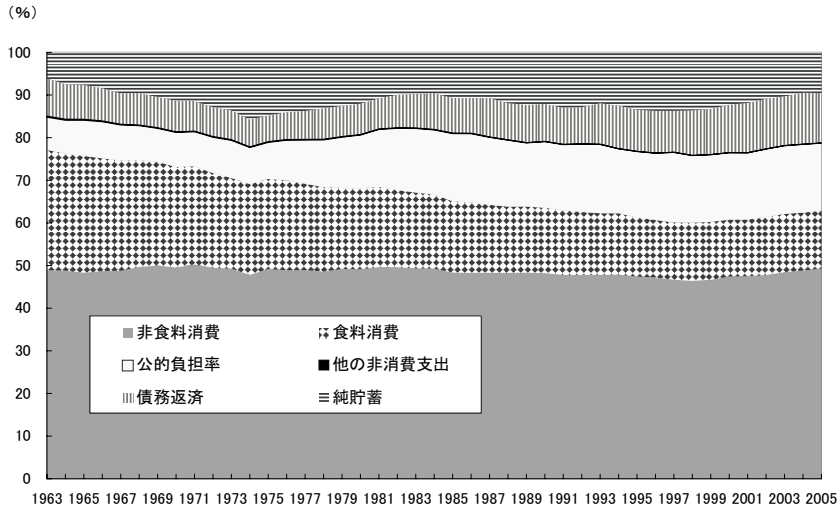

図２　実収入とその処分

いて何度か引用してくれた専門家もいないわけではなかった)。

私がなぜそう考えたか？　またいよいよ増税時代へ突入した現在では増税の景気抑制効果はあったとしてもやはり微弱なものに止まるだろうと見ているわけだが、その理由はなにか？　この点に答えるには図２を見てもらわなければならない。同図は昭和38年（1963年）～平成17年（2005年）の40数年間のサラリーマン世帯の実収入（税引前収入）の各費目への支出構成を示したものだ（原資料は総務省統計局『家計調査』)。

まず注目してもらいたい事実は、真ん中の公的負担率の推移である。勤労所得税、個人住民税それに他の直接税（固定資産税など）と社会保険料（年金、健康、雇傭など）の合計額の実収入に対する比率だが、昭和50年（1975年）まではほぼ一定、その後昭和61年（1986年）までに２倍近くまで拡大している。しかし、昭和61年以降は平成17年に至るまで再びほぼ一定で推移している（減税にもかかわらず公的負担率が低下しなかったのは主として社会保険料の負担増が相殺したためだ)。

次に着目すべきは、消費支出（食料＋非食料支出）の実収入比（＝税引前収入を分母とする「消費性向」）が公的負担率が拡大した昭和50年以降の10年余りの間も順調に低下している点である。この事実は家計の消費行動が公的負担率の変動から目に見えるほど影響されていないことを示す。また、債務（借金）返済比率（図の上から２番目の項目）も影響を受けていない。これは当たり前のことだ。税負担が重く（軽く）なったからといって、過去の借金に対する返済額の一部が免除（追加請求）されることなどあるはずがないからだ。

結局、この図から読み取れる命題は、公的負担率の上昇は純貯蓄率の変動で吸収される、逆にいえば、増減税は消費には影響しないという仮説である（私自身は遠慮して「ほとんど」影響しないといっているが)。ここまでが前記パースの「仮説発想」と「演繹」の段階である。「増減税があっ

てもそのほとんどは純貯蓄の変動で吸収される」との説明が可能であれば、「あれだけの減税を実施したのに目に見えるような効果が感じられなかった」のは何も不思議な現象ではないことになる。（かっての減税推進論者は「もし減税がなければ不況はもっと深刻だったはず」と言い訳をする。が、これはコイン投げ賭博で「オモテが出ればオレの勝ち、ウラならオマエの負け」というのと同じだ）。第３段階の「帰納」については、40年以上もの長年月この仮説を反証するような時期が見られない点を指摘すればよいだろう。

２．事実を学び、事実から学ぶ

現在は既成の解答の多くが通用しない時代だといってよい。経済学の教科書が教えてくれるものの大部分は既成の正解だ。あらかじめ手順が定められた問題解決法をアルゴリズム algorithm という。したがってあらかじめ正解の与えられていない現代という時代はアルゴリズムでは解決できない時代だといえる。

既成の正解がないとしたら、自分で解決法を探索しなければならない。それどころか問題自体をも自分で見出だすことが求められている。自ら見出だした問題の解決法を、これまた自分で、探求するとなると当然一発で解答が見つかることは期待薄である。何度も試行錯誤を繰り返しながら正しい答えを模索することになる。そしてこの模索過程の中で自らの能力に磨きをかけるのである。こうした学習態度をヒューリスティックス（発見的学習法）heuristics というが、自学自習を基本とする才能開発法である。名探偵、なかでもホームズによる問題解決の方法論こそが典型なヒューリスティックスである。私はそのように理解している。

パースの ab-duction は「世界の諸相の間に、無意識のうちにつながりを知覚する本能的行為で、ab-duction による仮説は稲妻のごとく閃く」（シービオク夫妻著富山太佳夫訳『シャーロック・ホームズの記号論』岩波書店）という。直観的なひらめきがなければ新しい発想は生まれないというのである。そこで直観力をどう育成・強化するかが大問題になる。私の体験からのアドバイスは次の２つである。

１つは、世界の諸相に関する広範な知識を習得する努力をすることだ（ホームズは「理想的な探偵の３つの必要条件」の１つが「知識」だといっている点を想起してほしい）。あらかじめ世界の諸相に関する知識が脳中にインプットされていない限り、それらの間のつながりを無意識に知覚することなど不可能だからだ。

２つには、事実を学び、事実から学ぶことに努めることである。そのため有効な方法の１つは、機会あるごとにパソコン画面上にグラフを打ち出し、この変数はなぜこういう動きをしているのだろうか？　と疑問をもち、考えをめぐらせてみる習慣を身につけることだ。そうすれば、知らず知らずの間にヒューリステックな学習能力が研磨され、事実を、そして事実から、何をどう学ぶか、その正しい方法論が会得されるようになると思うのである。

Edu-Tainmentのすゝめ

エデュテーンメントという言葉がある。Education と Entertainment の合成語だそうだが、私としては探偵小説は自学自習によるエデュテーンメントの教材として最適ではないかと考えている。

現代人はとても忙しい。だから読書する場合も、一石で何羽もの鳥をねらう同時多目的読書法を実践することが望ましい。望ましいというよりは、いまの厳しい競争社会で同僚より一歩先んじて出世を願うなら、そうする以外はないだろう。

そのような観点からは、探偵小説はその読み方次第では、単なる娯楽読み物であるにとどまらず、経済の謎解きのための手法を学ぶことから始まって、論理的な思考能力を高める、社会的観察眼を養ってくれる、社会人としての処世術を教えてくれる、等々、人生をより良く、より楽しく生きていく上で必要な多方面の才能開発に役立てることができると思うのである。貴君も試みてみてください。

終り

平成18年６月30日　於　附属図書館ホール